

## 一、義経逃避行・二つの経路

義経の逃避行は二通りある。その一つ前者は牛若・遮那王、鞍馬時代の奥州下り、もう一つ後者は平家滅亡後、頼朝に追われ、再度の奥州下りの二通りがある。

この二通りのコースは別々であるが、実際的には混同して考えている事例が多く、混乱している。このへんを見直して整理して記述してみた。即ち、東国コースと北陸コースの二経路に分けてみた。不思議とこの経路の街道筋ルートには、点々と義経伝説が存在している。

### ●牛若・遮那王時代の奥州下り（東国コース）

仁安四年（一一六九年・改元嘉応元年）、この頃義経は鞍馬寺・覚日律師のもとに預けられ、遮那王と名づけられ、修行の身となった。その傍ら鬼一法眼から武術を学び、厳しい修行に耐え、奥義を会得した。この頃、奥州平泉の砂金商人・金売り吉次と出会い、平家から追討される義経に奥州行きを勧め、義経に決断させた。

承安四年（一一七四年）、義経十七歳といわれ、義経はこの頃に鞍馬寺を密かに抜け出し、奥州平泉へと向かうことになる。この頃、既に義経主従は道案内に、金売り吉次と、武蔵坊弁慶、伊勢三郎、駿河太郎、次郎、佐藤兄弟、新宮十郎義盛、数名の主従関係ができ上がってい

た。

平家の嚴重な警護の捜査網をかいくぐって、覚日律師等に見送られて鞍馬を脱出した。途中元服して九郎義経と名乗った。一行は隱匿の旅を続けた。この間、義経の消息は風説を呼んだが、治承元年には義経は奥州平泉・藤原秀衡のもとへ到着していた。経路は陸路と海路を利用し、地域の伝承などから、東国、沿岸コースで奥州平泉まで下っていった可能性が強い。

※この稿は「逃避行の謎」のところで再び記述する。

### ● 頼朝に追われ、再度の奥州下り（北陸コース）

文治元年（一一八五年）、義経、壇ノ浦にて平家一族を滅亡させ、同五月、頼朝に会うため鎌倉入りを願うが、入口の腰越で足止めされる。鎌倉入りを拒否され相模国腰越満福寺に滞在し、頼朝に陳訴するため大江広元等により交渉し「腰越状」を送ったりするが許されず、一行はやむなく帰洛した。

その後も鎌倉幕府の挑発が激しく、義経追討は京においても行われ探索は厳しく、危険すら感じていた。義経は数名の従者と再び奥州平泉へ下ることを考えていた。その頃、同盟者の叔父・源行家父子も頼朝の不快を買い和泉国で処刑、大和国では伊勢三郎が処刑、京に潜んでいた佐藤忠信も自害して果てた。

一方、愛人の「静」も吉野山中に逃れ、さまよっているところを発見、捕らえられ、鎌倉に

送られた。『吾妻鏡』に記されているように「静」の舞は有名な話である。

この間、義経の行動は全く不詳とされているが、一説では後白河法皇（後の天台座主）や義経派の貴族などの援助により、奈良の興福寺、鞍馬や比叡山延暦寺などが密にかくまっていたという。

確かに後白河法皇にしても弁慶にしても、比叡山とは深いかかわりがあり、義経をかくまったことは事実であろう。日を追って厳しくなる追手に、義経は比叡山から密かに逃れ、いったん西海に赴いて軍勢を再興せんと攝津の大物浜（浦）から乗船したが、暴風雨に会い難破し、手兵も少なく畿内を点々と逃亡したが、意を決して敦賀の津から再び乗船して奥州平泉へ再度の船出をした。

※この稿も「逃避行の謎」のところで再稿する。

## 二、東国の義経伝説

### (一) 鈿子の伝説

- 犬 吠……義経が船出しても、あとに残された愛犬が主君を慕って吼え続け、鳴き声が聞こえた。
- 君ヶ浜……義経が好んだ海岸。それまでは、この海岸は海霧が深くたちこめ「霧ヶ浜」といったが、義経にちなんで「君ヶ浜」と呼ぶようになった。
- 馬 糞……義経の愛馬が海岸で脱糞した跡地（石切り場跡）。
- 矢立ての浜……義経が海岸へ矢を立てた場所
- 宝 満……鈿子長崎浜にある大小二つの島。判官（ほうがん）が訛って「ほうまん」になつたという。岩の形が、人間が仰向けになり天空を見ているように見える。
- 古藻浦……駒の浦ともいう。義経が駒を留めて休んだ浦。「こま」が「こも」に訛った。
- 千騎ヶ岩（せんがいわ）……義経が千騎の軍馬を隠したところという。大岩に空洞がある。  
外川浦。
- 犬 若……海岸に残された愛犬が主君を慕って七日七晩ほえ続けた。八日目の朝になると、

犬の形をした大岩が現れていた。地域の人々は、この巨岩を犬若犬岩と名づけた。また、愛犬の名を「若丸」といった。

● 倉橋

橋……義経主従が猿田地域の海上川に差し掛かり川を渡れないで困っていた時、馬の鞍を川の中に沈め、無事川を渡ったという。当初は「鞍橋」といったが、現在は「倉橋」と書くようになった。

● 笹巻橋

……倉橋地域に平時忠の伝承地があるが、義経と別れた時忠が椎柴の里まで来て海上川を渡る時、橋がないので笹竹を曲げてつくった橋を渡ったという。はじめこの橋を笹巻橋といったが、後になってからいつしか笹巻橋というようになった。

この時、時忠は

「命あらば またも渡らん 下総の

海上川の 笹まげの橋」

と歌を詠んだという。

● 青柳家の義経・弁慶文書……この文書は一枚の和紙に書かれ、先祖代々から受け継がれ、

大切に保存しているという。縦二七センチ、横二九センチ、箱、三六センチ×二七センチ。以前も東北・仙台の学者が何人か来て見ていったという。

〔書付文書の原文〕

此度狄地に渡為、養米粟七斗借用候也、若帰國無 之におゐては時之將軍に可願裁断